



在宅で迎える天寿を

地域ぐるみの療養を支える

2012年は団塊の世代の推計を厚生労働省が示す。65歳以上の高齢者の仲間入りをした。10年後には後期高齢者となる。このまま現状を放置すれば、2030年までに約47万人が「死に場所」を失う。2013年はそれ

が問われる年といえる。国療養支援診療所や訪問看護は「包括ケアシステム」として自宅で見守ることが示している。24時間の切れ目ない見守りと居場所の提供が基本となる。人口約1万人規模の地域を一つの

実現するためには医療側は外来患者数が減少することや、多職種によるチーム医療が必要になることを自覚しなければならない。

一方住民側にも、病気を病院だけで徹底的に治すというこれまでの医療への姿勢を見つめ直し、長寿から天寿へと意識変革が求められる。

単位として、医療、介護、福祉そして行政などのあらゆる資源が連携、協働しチームとなって展開していくことを目指す。

その中核となるのが「新生在宅医療」である。かかりつけ医が市町村や都市医師会のサポートのもと在宅

麻生発言

「無神経」であることは確かだ。配慮の足りない言動は人を傷つけやすい。だが、それを非難するだけではいけない気がする。

いくばくかの真実が含まれていないだろうか。終末医療に関して、「さっさと死ぬるようにしてもらわない」という麻生太郎副総理の発言だ。

四標軸

「自分ならば」という流れの中で言葉だった。

延命のための延命措置で長く苦しむ、醜態をさらしたくない。家族の負担とならず、穏やかに最期を迎えたいという気持ちを抱いたことのある人は多いのではないだろうか。

新潟市で在宅医療や終末期ケアに取り組む斎藤忠雄医師が今年の課題として挙げた言葉を思い出す。

「長寿から天寿へ」
いたずらに長い寿命を目指すのではなく、与えられた寿命の質を高めることが大切なのではないか、というのである。

住み慣れた自宅で適切な医療を受けながら、地域の人も家族にみとられる旅立ち方である。医療だけでなく介護なども含めた地域ぐるみの体制づくりが前提となる。

当然、それなりの財源も必要となる。「望まぬ」延命のための高額医療費が、そのために使われるのである。私なら了としたい。

副総理という立場を考慮すべきという意見もあろう。本人も不適当と発言を撤回している。

なんとか医療費を抑えようという、財務相としての神経が言わせたのだとしたら「無神経」では済まされない話だ。

だが、こうした発言をタプのよに扱ったことは、天寿の意味、命の質を語ることを妨げないだろうか。

(編集委員室長・鈴木聖二)

「天寿」の意味を考えたい

麻生氏発言適性に疑問符

新潟市北區
小堺 繁男(79)

21日の「社会保障制度改革国民会議」における麻生太郎副総理兼財務大臣の「さっさと死ぬように」発言は、いくら撤回したとはいえ、聞き捨てならないものを感ずる。

「さっさと死ぬように」発言は、いくら撤回したとはいえ、聞き捨てならないものを感ずる。

もともと、彼の失言癖は有名であり、かつては人格を否定するような発言もあったが、今度もまた、老人の気持ちを逆なでした。

「いいかげんに死にたい」と思っても「生きられます」と言及したものである。思いがけない生かされた人から「なんて生かされた人じゃかなわない。しかも政府の金でやってもらっている」という、財政当局の立場を端的に表したものである。

望まぬ延命に尊厳考える

新潟市
新海 レイ(64)

麻生副総理が、終末医療の件で発言されたこと、言葉えなかつたか、今も悔まま生きているのでは、と思いませんが、全く同感です。

20年ほど前、義父はチュープにつながら、手足も動かせない状態で「早く死にたい、殺してくれ、殺してくれ」と言っていました。

「早く死にたい、殺してくれ、殺してくれ」と言っていました。それでも「良い薬があり、自宅でがんばり続け、亡くなるまで、長い期間、自分が

食べた後、最後の言葉は「もう遅いから早く寝なさい」でした。

〒950-1189 新潟市西区善久772-2
新潟日報社編集局「窓」係
ファクス 025(378)9405
メール mado@niigata-nippo.co.jp

投稿の宛先